

都内の愛玩用ヨツユビハリネズミ *Atelerix albiventris* より検出された *Caparinia* 属ダニ類 (キュウセンダニ科 Psoroptidae)

田中祥菜*¹ 三輪恭嗣*² 浅川満彦*¹

採択：2016年1月28日

要約

家庭動物としてヨツユビハリネズミ *Atelerix albiventris* の飼育数が急増したことにより、この動物からキュウセンダニ科 Psoroptidae のダニ類が獣医師により見出されることが増えているが、分類学的には未検討であった。そこで、都内の動物病院に来院したヨツユビハリネズミから得られたダニ類について検討した。その結果、*Caparinia tripilis* と同定された。*C. tripilis* は国外の動物園展示動物や家庭動物として飼育下のヨツユビハリネズミから頻繁に見出されていた。

キーワード：Caparinia tripilis, ヨツユビハリネズミ, ハリネズミキュウセンダニ, キュウセンダニ科

JVM Vol.69 No.6, 443-445

1. はじめに

最近、ヨツユビハリネズミ *Atelerix albiventris* が、家庭動物として国内で多数流通している。そのため、この動物からキュウセンダニ科 Psoroptidae のダニ類が獣医師により見出されているようであるが、このダニ類は分類学的には未検討であった⁵⁾。そこで、2015年9月に東京都内の動物病院に来院した一般家庭で飼育されているヨツユビハリネズミ3個体の体表から得られたダニ類について、形態を指標に予備的な同定を行った(図1, 図2)。

2. 材料および方法

ダニ類は市販セロハンテープに貼付されたため、多くのダニ個体に剛毛の破損などが生じていた。最終的に形態学的検討に耐えられるとされたダニ類は雄成ダニ1個体、

雌成ダニ3個体(うち2個体で虫卵形成確認)および雌若ダニ1個体の計5個体であった。これらを70%エタノール液で固定・保存、ガムクロラール液により封入、スライド標本とされた。これらを光学顕微鏡により形態を観察し、顕微鏡描画装置により体部を描画し、各部位をエリアカーブメータ(X-Plan 380d III, 牛方商会)を用いて測定した。標本は酪農学園大学野生動物医学センターに保存された(登録番号AS 15767)。

3. 結果

雄成ダニ(図3, 図4)：体長342.3 μ m, 最大体副254.4 μ m, 背後板は幅広く、腹部後端 quadrilateral space も幅広かった。後述の雌成ダニに比して、体部概観は全体的に丸みを帯びていた。腹部後端に1対の3分岐した薄膜に覆われた突起を有し(図3), 各突起から剛毛が出ていた(図4)。第3脚末端に剛毛3本が認められた。

雌成ダニ(図5から7)：体長324.6 μ mから404 μ m, 最大体副253.0 μ mから272.0 μ m, 虫卵の大きさ159.1 μ m \times 83.5 μ m(図5), 背側剛毛は卵型の盾板に挿入されていた(図7)。第3脚の末端に3本の長い剛毛を有した。虫卵未形成個体では、このほか、尾側後端に1対の

*¹ Sachina TANAKA & Mitsuhiro ASAKAWA：酪農学園大学 獣医学類感染・病理学分野 〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582番地

*² Yasutsugu MIWA：みわエキゾチック動物病院 〒170-0003 東京都豊島区駒込1-25-5/ 東京大学農学部附属動物医療センター 〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1
連絡責任者：浅川満彦 (E-mail askam@rakuno.ac.jp)

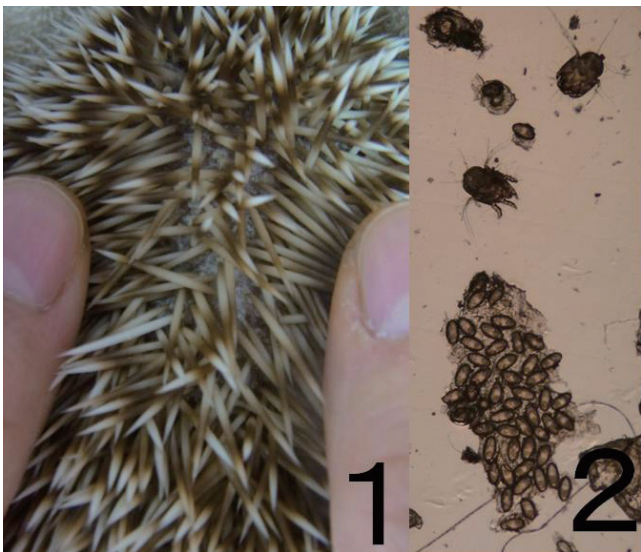


図1 および図2

疥癬症状を呈した都内動物病院に来院したヨツユビハリネズミの体表病変(図1) および同部のセロハンテープ法により貼付されたダニ・虫卵(図2)。

乳頭状突起が認められた(図6)。

若ダニ(図8): 体長 243.4 μ m, 最大体副 187.4 μ m, 成ダニに比して概して小型で, 特に, 脚が未発達であった。

第3脚末端に3本の剛毛を有すこと, 雄成ダニ腹部後端に1対の3分岐した薄膜に覆われた突起部を有し, 各突起から剛毛が出ていたこと, 雌成ダニ背側の上腕剛毛が卵型盾板に挿入されていたことから *Caparinia tripilis* と同定された^{1,6)}。本種は飼育個体を含め, ハリネズミ亜科の動物で報告されている *C. erinacei* とは雌成ダニ背側の剛毛挿入位置が異なる。また, 雄成ダニの腹部後端の形態も異なり, *C. erinacei* では腹部後端に1対のイチョウの葉様の薄膜に覆われた突起が認められる。

4. 考 察

C. tripilis は, 輸入直後の逸脱個体などごく一部の例外を除き³⁾, 国外の動物園展示動物や家庭動物などの飼育下ヨ



図3 および図4 ハリネズミキュウセンダニ *Caparinia tripilis* 雄成ダニ

図3: 体全部, 腹側 (Bar = 200 μ m)

図4: 尾部に認められた突起と剛毛 (Bar = 100 μ m)

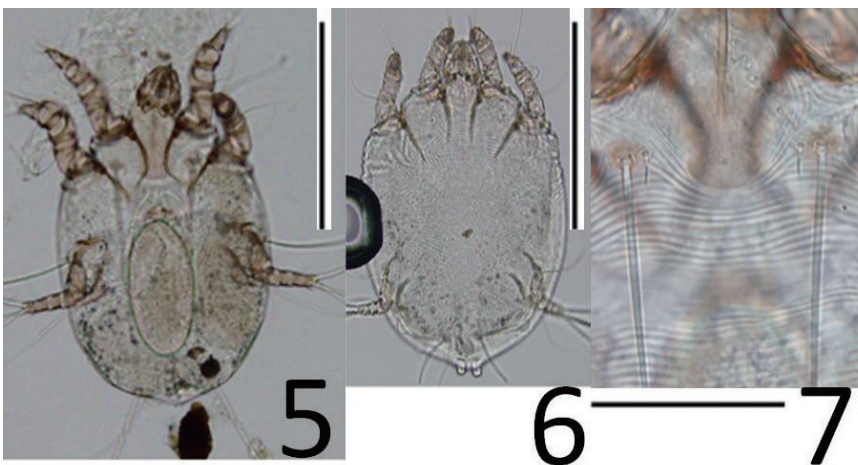


図5, 図6 および図7 ハリネズミキュウセンダニ *Caparinia tripilis* 雌成ダニ

図5: 体全部(虫卵形成), 腹側 (bar = 200 μ m)

図6: 体全部(虫卵未形成), 腹側 (bar = 200 μ m)

図7: 虫卵形成個体後端部 (bar = 100 μ m)



図8 ハリネズミキュウセンダニ *Caparinia tripilis* 雌若ダニ，腹側
(bar = 200 μ m)

ツユビハリネズミから頻繁に見出されていた。*Caparinia* 属のダニ類は宿主特異性が高いので，人を含めハリネズミ以外の哺乳類では問題視されないが^{2, 4)}，ハリネズミ類での健康被害は無視できない。日本では「外来生物法」によりアムールハリネズミ *Erinaceus amurensis* などの従来のハリネズミ類が輸入禁止され，その代替として別属のヨツユビハリネズミが国内で多数流通するようになった。そのため，この動物からキュウセンダニ科 Psoroptidae のダニ類が獣医師により見出されているようであるが，このダニ類は分類学的には未検討であった⁵⁾。しかし，形態分類学的な検討はされておらず，ヨツユビハリネズミの疥癬の確定的な診断上，支障があったが，本報はこのような場での有益な資料となり得ることができた。また，ヨツユビハリネズミの輸入について法的規制は無いからといって，現在

のように家庭動物として安易に飼育することは，このような外来寄生生物の温床となっていることも併せて警告しておきたい。

引用文献

- 1) Demkowska-Kutrzepa, M., Tomczuk, K., Studzińska, M. et al. (2015) : *Vet. Dermatol.* 26, 73-75.
- 2) Eo, K.Y., Kwak, D. & Kwon, O.D. (2015) : *Vet. Med.* 60, 57-61.
- 3) Kim, D.H., Oh, D.S., Ahn, K.S. et al. (2012) : *Kor. J. Parasitol.* 50, 151-156.
- 4) Letcher, J.D. (1988) : *J. Zoo. Anim. Med.* 19, 24-29.
- 5) 三輪恭嗣 (2015) : エキゾチック診療 7 (4), 102-106.
- 6) Moreira, A., Troyo, A. & Calderón-Arguedas, O. (2013) : *Rev. Brasil. Parasitol. Vet.* 22, 155-158.